

巻頭言

第72回日本放射線技術学会総会 学術大会を開催して

第72回日本放射線技術学会総会学術大会 大会長
群馬県立県民健康科学大学大学院
小倉 明夫



小倉 明夫 先生

1. はじめに

JRC2016会期中に、熊本を中心とする九州中部で大きな地震災害が発生いたしました。被災された方々に、紙面をお借りし、心よりお見舞い申し上げます。

さてJRC2016は、「Instructive, Innovative, and Integrative Radiology (まなび、のぼし、つなげる放射線医学)」をテーマに、2016年4月14日(木)から17日(日)までの4日間にわたりパシフィコ横浜を会場として開催されました。本大会は、第75回日本医学放射線学会総会(会長：玉木長良・北海道大学大学院)、第111回日本医学物理学会学術大会(大会長：荒木不次男・熊本大学大学院)、2016国際医用画像総合展(運営：日本画像医療システム工業会(JIRA)・小松研一 会長)、そして第72回日本放射線技術学会総会学術大会(大会長：小倉明夫・群馬県立県民健康科学大学大学院)の合同で開催されました(Fig.1,2)。

参加登録者数は、3学会合計で13000人、日本放射線技術学会総会学術大会への参加者は5000人、



Fig.1 JRC2016パシフィコ横浜会場前の看板

国際医用画像総合展への来場者数は21000人でありました。今年は、本学会でも電子ポスターと発表スライドの100%英語化を行ったため、英語を不得意とする会員の足が遠のくのではと心配していましたが、全くのとり越し苦労でした。

2. 国際化の夜明け

日本放射線技術学会では、将来構想特別委員会報告に基づき学会の国際化を目指しています。また、JRCでも国際化は重要なキーワードとなっており、世界が認める放射線医学の世界的学会となるべく努力をしているところです。シカゴでの北米放射線学会(RSNA)、ウーンでの欧州放射線医学会(ECR)に次いで、アジアを代表して横浜でのJRCが世界



Fig.2 大会ポスター

第三極として、世界中の研究者が集う放射線医学関連の学術大会として進出することを願っています。ITEM機器展示だけを見れば、ECRよりもJRCは優っていると考えます。しかし大きな壁は、言語です。講演も、発表もITEMでも日本語で対応している、海外から来日する研究者は理解できませんし、国際学会と呼ぶには程遠いでしょう。今年、遅ればせながら日本放射線技術学会が全ての電子ポスター(CyPos)とプレゼンテーションスライドを100%英語化したことによって、3学会すべてが英語表記となりました。また、プレゼンテーションの言語も本大会では40%が英語となり、正に国際化の夜明けが来たかと痛感しております(Fig.3)。海外からも、多くの研究者が演題発表をしてくれました(Fig.4)。

最初の私のJRC2016での企みは、3学会共同で英語のみでの発表セッションを作ることでした。4日間通して、1部屋だけは3学会および海外の研究者が入り混じって、ディスカッションできるように、「Call for paper」も3学会共同で世界に発信することでしたが、残念ながら足並みがそろわず、今年は断念しました。しかし近い将来、今年国際化の夜明けから始まる序章は、結実するものと考えています。その時は、ITEMも海外対応になっていることでしょう。

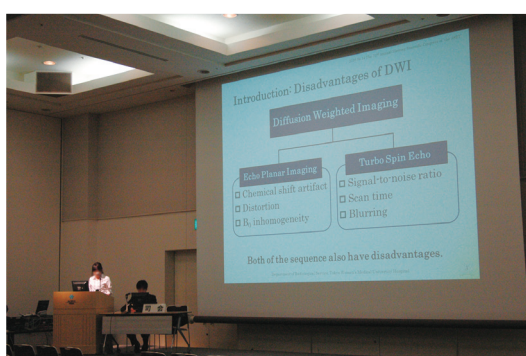


Fig.3 会員の英語発表



Fig.4 JSRTでの海外からの発表者

3. 合同開会式

4月15日の13時から、パシフィコ横浜メインホールで合同開会式が行われました。ステージ上で杉村和朗・日本ラジオロジー協会代表理事、3学会大会長および小松研一・JIRA会長が紹介され、挨拶、基調講演と続きました。

基調講演において私は、日本放射線技術学会の学術調査研究班で2010年から2014年まで共同研究を行った、拡散強調画像のADCの精度に関する研究「Apparent diffusion coefficient value is not dependent on MR systems and field strength under fixed imaging parameter」について講演をさせていただきました(Fig.5)。

合同特別講演は、宇宙飛行士の山崎直子先生から「宇宙、人、夢をつなぐ」というタイトルで、正に夢のあるお話をいただきました(Fig.6)。

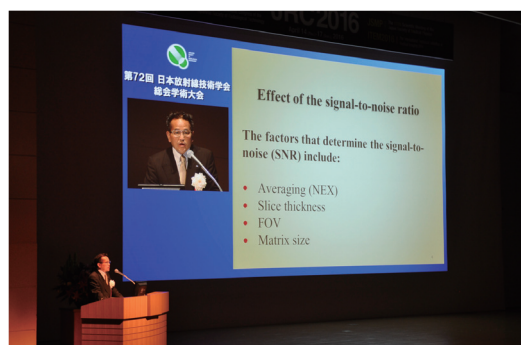


Fig.5 大会長基調講演

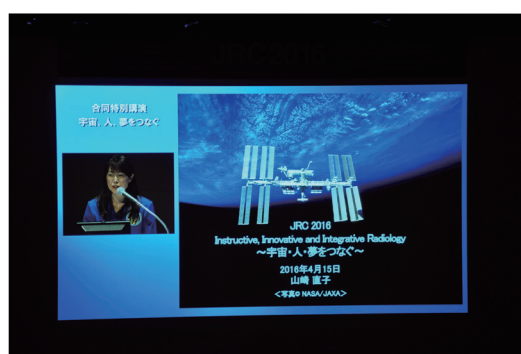


Fig.6 山崎直子氏による合同特別講演

4. 合同シンポジウムおよび合同企画

合同シンポジウムは、毎年3学会がそれぞれ担当しますが、今年はJRS企画が「次の25年の放射線医療の進歩を見据えて」と題して、遠藤啓吾先生と真田茂先生を司会として、各界の若手の有望なパネラーとともに、放射線医療の将来展望について熱い討論が行われました。JSMP企画は「医療被ばくの

線量評価と管理」のテーマのもと、赤羽恵一先生、大野和子先生を司会として、海外からのパネラーも交えながら、すべて英語でディスカッションが行われました。また、JSRT企画は、「造影剤が放射線医療にもたらした功績」と題して、早川克己先生と私が司会となり、放射線医療とともに歴史を刻んだ造影剤の進歩と問題点ならびに今後の展望について討論が行われました。

どの合同シンポジウムも、タイムリーで素晴らしい内容の企画であり、多くの聴衆者と白熱した議論が展開されていました。

また今年も、JSRTとJSMPの合同企画として、科研費獲得合同セミナー、2つの合同特別講演(New Concepts in CT Dosimetry, Integrated MRI-Linacs: A New Weapon in the Battle against Cancer)および合同特別シンポジウムを開催いたしました。これは、両学会において関連する内容を、多くの会員と共有したいという願望から実現したものです。

大会2日目には、恒例の合同懇親会が開催され、多くの会員と楽しい時間を共有することができました(Fig.7)。



Fig.7 合同懇親会
左から、本田JRS理事長、玉木JRS会長、
小倉JSRT大会長、杉村JRC代表理事、
荒木JSMP大会長、小松JIRA会長

5. 学術プログラム

第72回日本放射線技術学会総会学術大会のプログラムは、例年通り、特別講演、宿題報告、瀬木賞講演、RPT誌優秀論文受賞講演、3つのシンポジウム、9つの教育講演、専門部会合同シンポジウム、各専門部会ワークショップ、5つの入門講座、10の専門講座、海外招聘講演、代表直轄委員会フォーラム、JIRAワークショップ、マルチモダリティパネルディスカッション、学生選抜のNext Generation Sessionと多岐にわたり充実したプログ

ラムが展開されました。昨年公開された診断参考レベルの臨床への応用を鑑みて、2つのシンポジウムとJIRAワークショップで、DRLが話題にあがっていました。また海外招待講演ではEFRS会長のHakon H. Hjemlyがヨーロッパでの放射線技術学の現状について、Eugenia Kulamaは、イギリスでのMedical Physicistの現状とデジタルマンモグラフィのQA,QCについて、そして、Bram van Ginnekenは、胸部画像のCADについて講演をいただきました。

6. 一般演題

一般演題は、口述発表462題(内187題は英語プレゼン)、モニタ発表69題、実機展示発表5題、合計536題が発表されました。その中で、海外からの発表は28題ありました。口述発表では、発表者の40%が英語でプレゼンテーションされ、正に国際化の夜明けにふさわしい健闘ぶりでありました。日本人どうしの不慣れな英語での討論は、学会発表の本来の目的である、研究に関する討論を阻害する危惧がありましたが、CyPosにおいてノート欄に日本語で説明を加えていただいたことと、質疑応答では日本語での討論を許容したこともあり、問題なく活発な質疑応答ができていたと考えています。

また、昨年からはじめました演者席と座長席を同じ側に配置することによって、座長は演者をフォローする立場で討論を進めることができました。

7. 実行委員会企画

実行委員会企画では、初日に京都大学医学部附属病院の山本憲先生、木戸晶先生、ならびに東名古屋病院の遠藤登喜子先生に「放射線科医の診断プロセスを理解する」という企画で、頭部領域、婦人科領域、乳腺領域の画像診断のプロセスについて講演頂きました。これは、放射線技術学の中で、読影補助に関連する画像解析学、CADのプログラミングにも役立つものと考えていますが、初日にもかかわらず多くの会員が聴講されました。また、「診断に役立つ基礎技術学」として、画像診断にフィードバックするための技術学について各モダリティでレクチャーしていただきました。技術活用セミナーとしては、会員の国際化のための、「英語アブストラクトの作成法」、「英語スライドの作成基礎と実践テク

ニック], 「English Presentation Boot Camp」を他のプログラムとブッキングしても聞いていただけるよう, 同内容を2コマずつ割り当てました。加えて, 科学研究には必須の統計解析法を4コマ, 初心者向けにわかりやすく講演いただきました。

8. 合同表彰式および合同閉会式

合同閉会式は, 4月17日(日)の15時より, 埼玉医科大学の新津先生率いるJRC2016 Festival Orchestraの演奏の後に始まりました。このオーケストラは, JRC参加の先生方がボランティアで演奏いただく企画で3年前から恒例となっていますが, とても素人とは思えない素晴らしい演奏で, 4日間の学会の疲れを吹き飛ばしてくれる感動的な演奏でした。演奏いただいた皆様には, 心から感謝いたします(Fig.8)。

表彰式では, 根岸徹JSRT実行委員長の司会の元, 3学会の受賞者が発表され, 表彰状と記念品が手渡されました。受賞者の皆さんは, 非常にいい顔で記念撮影に取まっておられました。素晴らしい研究内容の成果に, 会場からも大きな拍手が送られていました(Fig.9)。



Fig.8 JRS2016 Festival Orchestraの演奏



Fig.9 合同表彰式の風景

閉会式では, 杉村和朗JRC代表理事の総括報告の後, JRC2016の各学会の大会長よりお礼と感謝の挨拶がなされました。つづいて, JRC2017の各大会長が抱負と意気込みを述べられ, 次年度のJRC2017への期待感がさらに深まりました。

こうして, JRC2016は多くの参加者に恵まれ成功裏に幕を閉じることができました。

9. おわりに

JRC2016で一緒に大会を開催いたしました, JRS 玉木長良会長, JSMP 荒木不次男大会長, JIRA 小松研一会長に感謝いたします。また, 開催にあたり, 実行委員会としてご尽力いただきました根岸徹実行委員長(群馬県立県民健康科学大学), 錦成郎先生(天理よろづ相談所病院), 木暮陽介先生(順天堂大学医学部附属順天堂医院), 飯村浩先生(東京女子医科大学病院), 松浦由佳先生(早稲田大学大学院)に心より感謝申し上げます(Fig.10)。加えて, 実行委員会を強力に支えていただいたJRCおよびJSRT事務局の皆様ならびにJIRAの皆様にも厚くお礼申し上げます。

最後に, 大会にご参加いただいた皆様にあらためて感謝申し上げますとともに, 来年のJRC大会がさらに飛躍することを祈念いたします。



Fig.10 第72回大会実行委員会メンバー
左から, 飯村, 根岸, 小倉, 宮地第73回大会長, 錦, 木暮, 松浦